
普通でありたい過負荷な異常者

Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通でありたい過負荷な異常者

【著者名】

ZZード

N1448Z

【作者名】

Fe

【あらすじ】

『普通でありたい』と願う少年は箱庭学園へと入学する。しかし、彼は異常であり過負荷である。彼のこれからの中学生生活はどうなるのか!?(作者文才のセンスは100%あります)

プロローグ（前書き）

初投稿のせいか駄文です…

生暖かく見守つてください。

プロローグ

とある学校のグラウンドで多くの学生が倒れている中、その中心に一人の少年が立っていた。

その少年の手からポタポタと真っ赤な血が下へと落ちていく。

少年の名は『桜島紅葉』。

幼少の頃にある事をきっかけに孤独な生活を送っていた。家族に見捨てられ研究所で実験動物または玩具のような扱いを受けてきたのだ。

そんな中一人研究所から抜け出し今まで生きてきた。頼れる人物もない紅葉は

一人孤独に暮らしていた。

「またか…。」

ポツリと誰にも聞こえないような声の大きさで紅葉は言葉を漏らした。

『普通でありたい』

それが今の紅葉の最も欲しているものだつた。しかし、今の紅葉は毎日喧嘩を吹っ掛けられては相手をボコボコにする日々が続いた。金や地位や名譽なんていらない。ただ、普通でありたい。

「これは中々興味深いですね。」

その声の方向へ振り向くと、一人の老人が紅葉に向かって歩いて来ている。

「誰だアンタ？」

「私は箱庭学園の理事長をしている不知火袴といいます。」

そう言い紅葉の顔を見ると満面の笑みとなつた。

「桜島君には

とても素晴らしい才能があります。とても興味深い。」

「何故俺の名前を知つている?」

そう言つと紅葉は少し殺氣を放ちながら言い放つた。

「まあまあ、そつ身構えずに、…実は君に提案がありましてね。」

その言葉に不思議に思いながらも、とりあえず聞いてみる事にした。

「単刀直入に言います、箱庭学園に来ていただけませんか？あなた
の才能を潰す訳にはいきません。」

「…」

その言葉に少し戸惑いを覚えた。しかし、同時にわずかな喜びが浮
きできた。何せ紅葉は、人に興味を持つてもらえるのは久しぶり
なのだから。

「…良いだろ？。」

「やつですかーでは早速です」「ただし条件がある」…何でしう
か？

紅葉は袴の目をしっかりと捉えこいつ言った。

「普通でいられる事、これが条件だ。」

プロローグ（後書き）

初投稿キンチョーしました（笑）

次回は主人公紹介でもしていきます。

主人公紹介（前書き）

設定がすこく長くなりました。

設定作るのって疲れますね(； ; ; ;)

主人公紹介

【名前】
桜島紅葉
さくらじま くれみ

【性別】

男

【容姿】

赤髪で髪を下に下ろしている。（禁書の垣根帝督のよつたな感じ）
目が死んでいて、制服は胸元を開けている。
顔は中の上で善哉よつ少し背が高いぐらい。

【性格】

普段は大人しい（？）が、自分の邪魔をされると男女問わず容赦無しになる。

面白い事は善悪問わず好きである。

普段から普通の学生として生きてこなかつたせいか、的外れな言動が多いいわゆる天然である。

【異常】

『暴鬼』
オーガ

身体能力の超強化や身体全体の硬質化の能力。

身体能力はめだかの乱神モードを軽く凌駕し、例えどんな攻撃を受けても無傷でいられる皮膚を持つ。

【過負荷】

『素晴らしき世界』
マイ・ワールド

自分を対象にする相手の異常や過負荷を無効化する。これによつて多磨川の『却本作り（ブックメーカー）』や志布志の『致死武器』による精神的ダメージも無効化出来る。

また、めだかの『完成』でもコピー出来ないようになつてゐる。

【過去】

生まれて数ヶ月で読み書きをマスターし、両親も最初は我が子の天才ぶりを喜んでいたが次第に気味悪がる。

結果、研究所に売り渡され実験動物のような扱いをされる。

（この影響で過負荷が発生する）

これと同時に幼少の頃のめだか達と接触しており、人生についてめだかに説き興味を持たれる。

度重なる実験への恐怖や両親に対する恨みが積もり、研究所の研究員を虐殺し脱走する。

また、双子の妹がおり妹自身も異常であつたが紅葉の一の舞にならぬように嘘を演じていた。これにより、紅葉は妹の事はあまり快く思つていない。

主人公紹介（後書き）

こんな感じですかね。

次回から本編入ります！

第一話、対談（前書き）

初めてこんなに長く書いた！

第一話、対談

（紅葉 side）

「ここか……。」

早朝、紅葉は箱庭学園の校門の前に佇んでいた。朝早いにも関わらず多くの生徒が部活の朝練に参加し汗を流している。

『箱庭学園』

そこは1・4組は普通科、5・7・9組は体育科、6・8組は芸術科。それより上のクラスは全員が特待生となっており、10組は特別普通科、11組は特別体育科、12組は特別芸術科、さらに上の13組には全国から集められた異常で構成されている。

そんな中、新たなスキル『過負荷』を持つ紅葉がこの箱庭学園に入学（もとい転校）して来た。

「今度こそ普通の生活が送れるハズだ。」

そつ啖き校門を通りグラウンドを歩いていの最中、『ゴンシーー』と頭に衝撃が走る。ふと後ろを野球の硬式ボールが落ちている。

(これが当たったのか…。)

そう思つていて遠くから走つてくる人物がいた。着ていてそれが野球部だと理解できた。

「おい！大丈夫か！？」

「ああ、心配ない。」

「心配な…絶対なんこぶ出来…ない？」

「じゃあな。」

紅葉はボールを野球部員に手渡すとサッサと生徒用玄関に足を進め
る。

後ろで野球部員が（。 。 ） こんな顔をしていたが気にしないでおけ。

（理事長室）

「待つっていましたよ桜島君。まあ、ソファーでゆっくしてトセ。」

袴がそう促すと紅葉はソファーに腰を下ろした。

「まずは御入学…まあ、転校という形ですがおめでとうございます。

L

「いやうりとじては条件が叶つなら何処でも良いがな。」

「ハツハツハ。 そうですか。」

袴は満足そうに笑うと机に複数のサイロロを置いた。

「サイロロ?」

「ええ。 桜島君良ければそのサイロロを振って頂けませんか?」

「怪しいな…。 まあ良いだらつ。」

そしてサイロロを握り机の上に転がす。

すると、

サイロロに亀裂が入り粉碎する。

「紅葉 side out」

「袴 side」

袴は目を見開き驚愕している。 そう、サイロが粉碎するのは生まれ初めて見たのである。

（まさかこれ程までとは…。 やはり私の目に狂いは無かった！－）

「これで良いのか？」

「ええ。 やはり君は素晴らしい才能の持ち主ですよ。」

「フンッ…。」

（彼には悪いですがあの計画の為に働いてもらいましょうか。）

そう考えた袴は紅葉にフラスコ計画のついて教えた。

「人為的に天才を創り出す計画か…。」

「ええ、どうです？」

「愚かだな。そもそも天才と言つものは努力の積み重ねで成り立つものだ。」

「ですが桜島君は…」

「黙れ…！」

紅葉がそう叫ぶ机に向かつて拳を振り落とす。すると机がいとも簡単に真つ二つとなつた。

「俺は…俺は『化け物』だ…。」

そう発言した紅葉の目は元々死んだよつた目をしていたが、より一層目が濁つしていくのが感じ取れた。

「スミマセンでした…。つい浅はかな事を言つてしましました。」

「…いや、」じちらも取り乱した。

一人の間に長い沈黙が続いた。

「どうですか？」の計画に参加して頂けませんか？」

「せつかも言った筈だ。その計画は愚かだと。」

「どうですか。残念だ。ただ、興味はある。」…はい？

「その愚かな計画が本当に成功するのか。興味が湧いた。」

「これは驚きました…。てっきり断られたかと。」

「面白そうな事は善悪問わず好きなのでな。で、どうするんだ？」

「是非参加して頂きたい！君がいれば計画も成功します！」

「分かった。よろしく頼む。」

「ハハハハハハ。

二人がそう言うと互いに握手をした。

「忘れていました！ 実はもう十三組の十三人^{サーティン・パーティ}は満席でした。」

「心配ない。」

そう言い放った紅葉は、邪悪な笑みを浮かばせこいつ言った。

『いざれ潰す』

第一話、対談（後書き）

主人公のキャラが自分でも分からん…。

新感覚、ダークヒーローみたいな感じでOKにしよう。

第一話、1年1組（前書き）

前半、ギャグです。

それでまあざわざー。

（袴 sides）

「ふう…。」

袴は紅葉との対談を終えて一息ついていた。あの少年と話す時はどうも神経を使い過ぎてしまつ。

（しかしあの最後の言葉…）

『いざれ潰す』

（あの言葉は十三組の十二人の誰かを潰し、その席をもひりつもり（サードイン・パーティ）か？確かに彼になら可能ですね。）

「あなた達はどう思ひますか？」

そう言つと袴の後ろから六人の男女がそれぞれ出でた。

「あいつ中々面白そうな奴だったなあ。てか、あいつ俺らの事絶対
気づいてるぜ？」

高千穂仕種。3年1-3組所属。血液型AB型。験体名『棘毛布^{ハーフラッピング}』

「今僕の持っている武器で彼を殺すのは無理でしょう。戦わなくて
も彼の危険さが分かりましたよ。」

宗像形。3年1-3組所属。血液型AB型。験体名『枯れた樹海^{ラストカーベット}』

「机叩き割つたぐらいでいい気になっちゃってー今度会つたら〇 H

A N A S H Iだね！」

古賀いたみ。2年1-3組所属。血液型AB型。験体名『骨折り指切り（ベストペイン）』

「私は意見を有しない。思つことなど何もない。」

名瀬天歌。2年1-3組所属。血液型AB型。験体名『黒い包帯^{ブラックホワイト}』

「そんな事言つてるけど、改造してやりたいって気持ちが僕には伝わってるよ。でも、僕の『受信感度』を使っても彼の思考が読めなかつたよ。」

行橋未造。3年13組所属。血液型A B型。験体名『^{ハムサトリハビコス}狭き門』

「フン！王である俺の前での傲慢な態度が気に食わん！！」

都城王土。3年13組所属。血液型A B型。験体名『^{クニヒタク}創帝』

「ホホオ、流石が君達は彼の強さが分かっていますね。いやはや、これからどうなるか楽しみですね。」

「それにしても良いの？彼は普通に過ごしたいんでしょ？大丈夫なのかな十三組なんかに行かせて…。」

「…。」

「理事長さん？」

「たぶん大丈夫ですよ？古賀さん。それでは今日は早退させていた

だれか。」

「なぜ疑問系！？絶対行かせた事後悔してる！後、帰っちゃうの！」

「あの庶民の事だ。今頃怒り狂いながら、」
方に來てるだらう。」

その声が聞こえたと同時に、理事長室の高級なドアが紅葉の手によつて「ミミクズとなつた。

「ほらな。」

括 *side out*)

紅葉 sides

クソッ！ 何が普通のクラスに入れてあげようだ！

教室に入れば無駄にデカい奴がいびき出しながら寝ていた。その事はまあ許せる。許せんのは黒板に書いてある事だ！

『永久自習』

そう、キレた訳はこの『永久自習』のせいなのである。そして、俺はあのバカ理事長ともう一度話をつけるべく、今一度理事長室に帰つて来たが……。

「…………」

「ん？ 確かオマエらは……」

確か俺が袴と話している時に後ろに隠れていた六人組か。

「おい。袴はどこだ？」

「理事長なら早退した。代わりにこの手紙を君に渡せと言われた。」

宗像はそう言いつと手紙を紅葉に渡した。

紅葉はその手紙を読み始める。

「拝啓、桜島君。この度は、私の不手際で桜島君に不快な思いをさせてしまつてすまない。お詫びとして桜島君には1年1組に移つてもらいます。それでは、たよるなり。 不知火袴より」

読み終えると辺りがシーンとなり理事長室が無音状態となる。しかし、この手紙の意味を理解した紅葉は落ち着きを取り戻した。

「邪魔したな。」

そつと理事長室から出て行った。

（13組の面々 sides）

「行つちまつたな。」

高千穂がそう弦くと、行橋が続くよう…

「嵐が通り過ぎたみたいだね…。」

「ON・OFFの切り替えが素晴らしい子だったね…。」

と、古賀が続ける。

「フンッ！ ト、うん。」

都城がそう言つと時計台へと向かう。その他の面々もそれに時計台へと向かつた。

（13組の面々 sides out）

全く、めだかちゃんもよくあんな事やるよ。24時間365日相談を受け付けるなんて…。俺には出来っこないよ。

「あひやひや、ビーしたの人吉くん？」

「不知火か。いやなに少し考え方してただけだ。」

「ふうん。そういうばさつきの黒神さんスゴかつたね。全校生徒を前によくあんな言えるね。人前に立つのに、慣れてるのかな？」

「カツ、ありやあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのになれてんだ！」

「あひやひや、それもそつかもね！でも支持率98%つてのはスゴいね。」

「まあ、昔からあんな奴だつたからな。もつ驚きはしねえよ。」

そう、あの幼き頃に研究所で出会った、あの赤髪の少年のおかげで今のがいるし俺もいる。

あの赤髪の少年は今何処で何をしているのか。出来れば会つてもらつ一度話したい。

「つて、聞いてるお？人吉くうくん…。」

「おうわつーー。」

不知火のその不気味な声で善吉は現実世界に引き戻された。

「悪い聞いてなかつた。で、何だつて？」「

「だから今から転校生が来るんだつてさ。」

「転校生へ。ひとつまたこんな時期に。」

「ああ？」

そうやり取りしていると担任の教師が教室に入つて來た。

「お前ら席につけ　　。ほら、そこ女子早く座れ　　。」

そう後ろを伸ばす話し方で教師は着席を促した。

「今日はお前らこ良い二コースがあるで　　。何どこのクラスに転校生が来ます。じゃあ、早速紹介してもらつぞ　　。」

そう言つと、教室のドアがガラガラと開く。

そこにいたのは、背が高く胸元を開けた制服を着た赤髪の生徒が入つて來た。

「桜島紅葉と言つ。一年間よろしく頼む。」

第一話、1年1組（後書き）

無駄にデカい奴の異常が効かないのは、紅葉の過負荷のおかげです。

良かつたね！デカい奴！

第三語、専念（専念や）

それでは第三語じつや。

第三話、再会

（善吉 s . i . e ）

「あつ、結構イケメン！」

「そりかあ？ 目死んでんだぞ。」

「モリが良いんぢゃない。ミステリアスな感じで！」

そつやつて周りの生徒が騒ぎだすが、善吉はその話題になっている
転校生を見て衝撃を受ける。

（もしかしてアイツは……。）

そう、善吉は幼少の頃に研究所で出会った赤髪の少年と転校生の少
年が同じ赤髪だという事に気付く。

「じゃあ、今から質問タイムに入りま
す。失礼な事は聞くなよ
。」

教師がそう言つと先程紅葉の事をイケメンと言い張つた女子が質問する。

「彼女つている？」

いきなりその質問かよ！とか、ストレートに聞きすぎだらー！？

「いない…。」

それに続くかのように他の生徒も次々と質問する。

「好きな食べ物は？」

「基本的に全部好きだ。嫌いなものはない。」

「好きな芸能人とかいる？」

「余りテレビは見ないからどんな奴がいるか知らん。」

「何で目死んでの?」

「放つとけ…。」

「どうする…。もしかしたら本当にアイツかもしね。」

（一か八か聞
いてみるか…。）

意を決して善吉が立ち上がり紅葉に質問する。

「俺の事憶えてる?」

（善吉 side out）

（紅葉 side）

「…は?」

思わずマヌケな声が出てしまった。…だが、確かに何処かで見覚えがあるな。

「ほらー！まだ小さい頃に研究所で会つただろーー？」

「つ…！」

研究所、その言葉に俺は思わず顔が険しくなる。あの研究所のせいで。俺の人生が狂いだしたのは！

「おひ、おい。どうなんだ？」

しかし、研究所で会つた子供なんてあまり憶えてない…。唯一憶えてるのは待合室にいた2人だけだ。

…ん？もしかしてあの2人の子供なのか？

「もしかして待合室にいた子供か？」

「そうだよーいや～久しぶりだなー。？」

善吉はやつぱり席を立ち、紅葉まで歩くと手を掴み上↑下↑に振る。

「俺は人吉善吉って名前だ。元気にしてたか？今度めだかちゃんにも会ってくれよ。きっと喜ぶよー。」

「めだかちゃん？」

「ああ、あの時一緒にいた子供か。今思えばあの子には偉そうな事を言つたな…。」

「あの時のお前のおかげで、今めだかちゃんがいるし俺がいるんだー！」

俺のおかげ…か。俺はただ『人を幸せにする事を目的に生きたらどう

うだ?』と言つただけだが。

(まあ、あの時はまだ人間のクズの部分を知らなかつたからな……。)

「どうした?」

「いや何でもない。」

少し感傷的になつてしまつたな。

「あの……。感動の再会の最中に悪いけどお……、もう良いかい?
?」

「あつ、すいませへん……。」

そう教師に注意された善吉はそそくかと自分の席に戻る。

「じゃあ桜島君の席は……、人吉君の隣の空いてる席ですね……。」

「分かりました。」

紅葉はそう言つと自分の席へと辿り着きイスに座る。

「よろしくな。気軽に善吉つて呼んでくれ！」

「あたしは不知火つて言つんだ。よろしくね。」

「ああ、じつうじやろしく頼む。紅葉で構わない。」

（今までいた学校ではまずあり得ない事だな。ようやく普通に生きられるだろつ……。）

そう紅葉は思い、これからの中学校生活に少なからず期待をした。

だが、紅葉はまだ知らなかつた。この善吉達との出会いが、紅葉の学校生活に多大な影響を及ぼすとは知らずに……。

第三話、再会（後書き）

最後がよくあるドラマみたいな感じになりました…。

能力変更について（前書き）

急で申し訳ございません。

能力変更について

能力変更する点は一つだけです。

まず、主人公の過負荷『素晴らしい世界』^{マイ・ワールド}の発動がON・OFFを可能にしました。

理由は、安心院の『アリバイロック』を無効化してしまうからです。このしないと、安心院との絡みが難しくなるので仕方なく変更する事になりました。

また、主人公の異常や過負荷はまだ発展途上で、これからもっと成長する予定です！

もしかしたらまたこのよつたな変更があるかもしれないの、予め忠告しておきます。

また、主人公の過負荷で主人公自身の異常が無くならないの？と、

友人に言われました。ですが、影響で消える事はありません。

主人公自身の異常が自分の過負荷の

能力変更について（後書き）

改めて、「迷惑おかげして申し訳ございません」と言

第四話、生徒会長（前書き）

長つたらしい文章が続いてしまつた。

文才が欲しいつス…。

めだか sides

「フム、こんなものだろ。」

この度、晴れて箱庭学園第98代生徒会長となつた黒神めだかは生徒会室の模様替えを終えた後だった。

「部屋はこれで良いとして、後は役員を募るだけだな。」

今の生徒会は生徒会長一人しかおらず他の役員の席は空いたままだつた。

（まあ一人は善吉だと決めている。他の役員は後々増やしていくば
良いだろつ……。）

めだかはそう考へると生徒会室を出て1年1組へと歩いて行く。

文武両道・容姿端麗・質実剛健・才色兼備・有言実行の完璧超人と謳われている黒神めだかは、生徒会長選挙で大言壯語を放つた結果、98%の支持率を得た大物人物である。

しかし、そんなめだかも幼少の頃に悩んでいた事があった。それは『人生は何を目的に生きるのか?』という事だ。

その時は人生は余り良いものではないと、少なからず思っている節があつた。だが、そんな時ある少年と出会つた。

その少年は赤髪でどこか不思議な雰囲気を持つ子供だつた。めだかは気付いたらその少年に『人生は何を目的に生きるのか?』と質問していた。

すると、その少年は少しばかり考えた後に。

『人を幸せにする事を目的に生きたらどうだ?』

その言葉がどれだけ心に響き渡つたか。今のがいるのはその少年のおかげである。

(あの少年には感謝してもし切れない…。)

そうめだかが一人で昔の事を思い返していると、田辺の一年1組へと到着した。

(これではいかんな。氣を引き締めねばならん。)

そう思い教室のドアを開けると、めだかに衝撃が走る。

まず田に飛び込んで来たのは、善吉が男子生徒と談笑していた。

しかしその男子生徒は、赤髪で昔感じた不思議な雰囲気を持つていた。

「まさか…。」

そう歎くとその男子生徒へと足を運び出す。

もしかすると…！、もしかするとあの時少年では！？

そう思つていると、いつの間にか男子生徒の後ろにまで歩いていた。

「ん？」

その男子生徒がめだかの気配に気付き後ろに振り向く。

めだかは確信した。根拠は無いがその男子生徒が、あの少年である事に間違いないと。そして。

「久しづつ…！」

めだかはその男子生徒に抱き付いた。

「めだか side out～

（紅葉 side）

一体何が起きたんだ？

紅葉は今の起きた状況に全く追いでいけなかつた。後ろから気配を感じ振り向けば、そこには美人な女子生徒がいた。

だがその女子生徒は紅葉の顔を見るなり『久しづりつ……』と言つ抱き付いてきた。

「誰だお前は？後抱き付くな。暑苦しい。」

だが中々離れようとしない。腕を後ろに回されがつちりとホールドされている。

（いい加減鬱陶しくなつてきたな……。殴り飛ばして無理やり離れさせむか。）

紅葉が恐ろしい事を考えていると、善吉が女子生徒を見て仰天する。

「めだかちゃん!…ビリヒーヒンな所に?」

「貴様を生徒会に招き入れようと此処まで来た。だが、こんな所で懐かしい人と再会する事が出来るとはな。」

今確か善吉はめだかちゃんと言つたな。となると、善吉と一緒に待合室にいた子供か。

「分かつたから取り敢えず離れる。」

「何故だ？ そう恥ずかしがらなくても良いのだぞ。」

「恥ずかしくなどない……。」

「なら良いではないか」

やつぱりとこちらに回していく腕に力が込められた。

紅葉は諦める事にし、ボソッと呟いた。

「「」の学校にまともな奴はいないのか……？」

自身もまた、まともな奴ではない紅葉がそう嘆いた。

第四話、生徒会長（後書き）

紅葉とめだかの初絡みでした。

第五話、勧誘（前書き）

最近までテストがあり、結果は散々でした＼（^○^）／

小説書きながらの勉強は難しいです…。

第五話、勧誘

（紅葉 side）

「生徒会？」

「うむ。善吉と一緒に紅葉もやつてくれないか？」

ちなみに俺はめだかとの自己紹介はもう終えている。

何故下の名前で呼ぶのかは知らないが……。

「ちよつと待て！ 何で俺まで生徒会に入らなきゃならん！？」

「何を言つのだ善吉。お前が入るのは決定事項だ。」

「鬼！ 悪魔！ 人でなし！ ！」

善吉（氣）の毒に……。しかし、このままでは俺も生徒会行きではないか？

「善吉は庶務で決まりだ。紅葉はびいひあるか…？」

「せっかくだが断らせてもらひつ。」

「何故だ？」

「出来れば普通に過いしたいんでな。」

「これで諦めてくれるだらう、そつ思つていたが。」

「何を言ひ。生徒会に入る事は特別ではないぞ。そもそも、学生が生徒会役員になる事は普通ではないか。」

「…。」

「痛い所を突かれた…。しかし、何故ここまで誘つてくれるのだ？」

「黒神は何故そこまでして俺を誘つ?」

「めだかで構わん、別に理由などない。ただ…。」

「ただ?」

「紅葉と善吉、私は貴様達の事が大好きだからだ!」

『凜つ…』 とこう文字が見えてしまつのはたぶん氣のせいであろう。

「いや意味が分からん。」

「わつこう訳だ。早速生徒会室へ行くところだ。」

「うわっ、引っ張んな! 紅葉何とかしてくれ!」

「もううどうともなれ…。」

「遠い田じて何何言つてんだ! こうなつたら俺だけでも…、つて力
強くて離れねえ!」

「やつそのアタシが『ハシマ』だつた…。」

不知火はそう言うと一人隅でいじけていた。

後日、善吉が不知火のご機嫌取りのために焼き肉に行く事となつた。

しかし、不知火の暴飲暴食のおかげで財布の中身がうまい棒も買えない金額になり、その夜善吉は枕を涙で濡らす事となつた。

第五話、勧誘（後書き）

意見や疑問に思つた事があればいつでも聞いて下さい。

次回は本編から外れるつもりです。

閑話?、普通の高校生にならために……（前書き）

本編には関係ありません。

少しばかり紅葉がハジケます。

『 閑話？、普通の高校生になるために…』

（紅葉 side）

昼休み、紅葉と善吉は数人の男子生徒と雑誌を見ていた。

「やつぱり ちゃんは良いよなあ…。」

男子生徒Aがやつぱりと、

「×××ちゃんが一番だけどな。」

男子生徒Bがやつぱり反論する。

「何言ってんだ、 ちゃんに決まってんだろ。」

最後に善吉がやつぱり叫びた。

そう今この4人（正確には3人）はアイドル談義をしていた。

（誰が誰だかわっぽり分からん。）

「そう紅葉は普段テレビを見ないせいか最近のアイドルには全く無知なのである。

「紅葉はどの子が良いんだ？」

「そう言われてもな……」これに載っている奴らは全員知らん。」

「マジかよー？」

「それは高校生としてどうかと思つがへ

「それ程深刻ではないだろ？。」

「いーや深刻だ！普通の高校生は気になる人が一人いてもおかしくねえぞ？」

「何だと…？」

その言葉を聞いた紅葉は絶句する。

俺とした事が、直に普通になる事に逃げてこたとはな……。

そう紅葉が一人で勘違いをしていると、ある提案が浮かんだ。

「…善吉。」

「じつした?」

「放課後付き合つてくれ、寄りたい場所がある。」

「じー行くんだよ?」

善吉が聞くと顔をニヤリとし答えた。

「本屋だ。」

「紅葉 side out」

「古賀 side」

「アハハ！やつぱつこのマンガは面白いなあ。」

「やつぱつと古賀は店内にも関わらずグラグラ笑い出した。

「古賀ちやん、こじは店内だぜ。」

「あつ、『ゴメンね～名瀬ちやん。つこマンガが面白い』

しかし、その名瀬も顔に包帯を巻きナイフが刺さつてることにつ降
しれ全快であった。

「やつぱれば欲しい本見つかったの？」

「ああ、見つかったぜ。」

そつ言いつと手に持つていた本を古賀に見せる。

『猿でも分かる！楽しい人体解剖！！part・3』

「…変わった本だね。ていうか、part・3って事は1・2もあるんだ…。」

「俺の愛読書だ。」

そんな会話をしていると、

「何買うんだよ？」

「まあ待て。ん？アイツは…。」

今何処かで聞き覚えのある声がしたよ!つな…。

古賀はその声のすなの方へ向くと、

「確かにアンタは理事長室にいた…。」

（やつぱつ…。）

古賀が思つてゐた通り、その声の主は桜島紅葉であった。

「紅葉のこの人と知り合いか? (ていうか服ヤベーだり…。) 」

「ああ、俺達の一つ上の学年の奴だ。」

「あつ先輩だつたんスか、こんだけわつス。」

「え、ここにあわ…。」

何である子（紅葉）がいるの…。絶対本屋とか来なさそーだよ！

「何でお前がいるんだよ。」

名瀬がそう問いただすと、

「本屋に来たのだから本を買ひに決まつている。」

本とか読むんだ…。何か意外。

「で？ 紅葉は何買つんだよ。」

「付いてこれば分かる。」

そう言つと紅葉は店内を歩き回る。

3人が不思議そうに眺めていると、

「見つけた。」

そう聞いた3人は紅葉へと駆け寄る。そこは 。

「 「 「グラビアコーナー？」」

「そうだ。」

すると紅葉は真剣な顔でグラビア雑誌を漁り始めた。

（（（どう））う事だ（なの）？））

3人の考えていた事が見事にシンクロしていた。

続おせいかつか閑話？ここで出します。

後、作者は古賀ちゃんが好きです。

シリアス（？）回です。

第六話、生徒会補佐

（紅葉 side）

着いてしまった。今さらながら後悔してきた。

「では役職を決める。庶務は善吉で決まりだ。」

「拒否権無しかよーもう好きにしてくれ……。」

「後は紅葉なのだが……、何がしたい？」

「俺は役員にはなりたくないのだが。」

「もう言ひつな。どうか私に力を貸してくれ。」

「そう言ひとめだかは頭を下げそう言ひた。

「力貸してやれよ、こんなに頼んでるんだし。」

「お前は一人だけ役員になるのが嫌なだけだろ。」

「まあそれも理由だけど…。他にも理由はあるぜ。」

「？」

そうつ言づと善吉は真剣な顔で紅葉を見る。

「めだかちゃんはお前の言葉を信じて今まで人を幸せにするために頑張ってきた。だったら、言つた本人がそれを実行しなくてどうするんだよ？」

人を幸せにするか…。今の俺に出来るのか？いや出来るハズがない、こんな人殺しに…。

「そこまでだ善吉、本人が嫌がるのなら私は無理はさせない。」

「めだかちゃん…。」

「すまなかつたな紅葉、だがこれだけは言わせて欲しい。私は紅葉の言葉を信じていて良かったと心から思つていい。」

「何故そこまで気高くいられる……。何故そこまで輝いていられる……。」

「ではこの話は無かつた事にしよう。実は早速仕事が入つていてな、それに取り掛からねばならん。」

「待て。」

紅葉がそつそつと止めると、ある疑問を聞いてみる。

「何故そこまで人を信じる事が出来る?..」

「ふつ、何を言つておる。人を信じる事を教えてくれたのは紛れもなく紅葉、お前だ。」

その言葉を聞いていた紅葉は黙り込む。そして。

「ハツ！ ハアーハツハツハア！ ！ ！ ！」

「どうしたの？」

紅葉が大笑いした事にめだか達は怪訝に思つ。

「ふつ、的外れな答えが返ってきたものだから、おかしくてしちゃうがなくてな。」

そう紅葉は笑い終わった後ふと答え始める。

「こんなに笑つたのはいつぶりだろ？ 」。赤ん坊の頃に両親と遊んでもらつた以来だ。

「気が変わつた。俺もめだかを手伝おつ。」

「本当か！？」

「ああ、ただし生徒会補佐とこいつ形で良いな？」

「それでも構わん！これからもみるしく頼むぞーーー！」

「紅葉一緒に頑張りうばー！」

「ああ任しておけ。」

「ついして新たな生徒会が発足された。

（それにしても入ってきた仕事とは何だ？）

第六話、生徒会補佐（後書き） (あむき)

次回は初仕事に入ると思います！

第七話、初仕事（前書き）

それでほどじつぞーーー。

第七話、初仕事

（紅葉 side）

「それで仕事の内容は？」

「これだ。」

そう言つとめだかは紅葉に紙を手渡した。

『私の飼つている可愛いワンちゃんが行方不明になりました。どうか生徒会の皆さん、私のワンちゃんを見つけて下さい。』

「何だよコレ、普通こんな生徒会に頼まねーよ。」

「何を言つ、私は24時く「分かつた分かつたーやれば良いんだろー…やつてやるよー」よひしー。」

「全く……犬探しは探偵にでもやらせていら。」

「紅葉までそんな事いつのか? だとしたら私、泣いちゃうだー?」

「何故そこで泣くんだ…、気乗りしないが仕方あるまい。」

「ありがとうー。」

「抱き付くな。後、顔が近い。」

「ハア…。全く面倒な仕事が入ったものだ。」

「その犬の目撃情報は無いのかよ?」

「うむ、時々この学園内で目撃されている。」

「目撃されているのなら、何故捕まえんのだ…。」

「仕方ねえなあ、行こうぜ紅葉。」

「ああ。」

二人は行こうとしたが、ふと紅葉が足を止めた。

「めだかは来ないのか?」

「めだかちゃんはな…。この仕事はダメなんだ。」

「何故?」

「動物に…逃げられるのだよ…………。」

めだかはそう言つと、このポーズになる。

「めだか…ならば仕方あるまいな行くぞ。」

そして紅葉達は犬を探すべく生徒会室から退室する。

「グランド」

「何處にもいねえ……。」

「犬が学園内にいるなんてにわかに信じられないけどね。」

意氣消沈の善吉に不知火が後に続くかのように話す。不知火がいるのは、「面白そうだね！」と言い勝手に付いて来てるだけである。

「そもそもどんな種類の犬なんだよ？」

「確か……。」

そう言つと田の前に謎の物体が現れる。

「グルル…、フシュルルルルウウウ…！」

その物体はおぞましい唸り声をあげたが、外見で犬だと判断できた。

「「「いた。」」

いや確かに犬だが……、あれは犬の皮を被つた何かではないのか？

「何だよアレ！？どこの肉食獣だよ！…」

「思いだした、確かあの犬はボルゾイと言う種類の犬だ。別名ロシアンウルフハウンド…。」

「ほら！ウルフって入ってんじゃん！…」

しかし犬があんな鳴き声するのか？一体どんな育て方をしていた。

「さつ紅葉が考えていると、

「さつちに歩いて来たぞ！…ビーすんだよ！…」

「じゅあコレ使いなよ。」

「ソーヤージ…、餌付けをするのか。だがあの犬（の皮を被つた何か）に通じるのか？」

「おお！…これで餌付けすれば良いんだな！…？」

「んーん違つよ。コレをおなかに仕込んでね、『さあああー…内臓食われたー！…・と見せかけて寒はソーヤージでした』『つて、ギャグやつて欲しいのー！…』

「してビビうなるんだ…。あつ、善吉が死ぬだけか。

「するわけねーだろー！…」

「そ、うわがまま言わずにねつほりーもう来てるよ?」

「マジかよー!? あー もうクソつー やケクソだあーーー！」

そして善吉は犬に突撃して行く。

「アヒヤヒヤヒヤ！！ステキ！ステキ！人吉君てば超ステキ」

「写メを撮っている。」

善吉よ……、お前の事は忘れないぞ。

「勝手に殺すなあ……。でももひ瀕死だけど……。」

生きていたか、中々タフな奴だな。

「仕方ない、一旦退却だ。」

一旦態勢を整えるため生徒会室へ向かう事となつた。

「なるほど……、その行方不明の犬が人を捕食しようとする程凶暴になつていたと。」

「ああそりだよ。」

不知火を肩車している善吉がそり答える。

「……貴様らのイチャつきは少しばかり腹が立つ。まあ私には紅葉がいるから良いのだがな。」

「抱き付くなと何度も言えば分かる……。」

「にしても、何か良い作戦はないのかよ?」

「問題ない、私に任せてくれが良い。」

「大丈夫なのか?お前は動物に嫌われているんだろ?」

「ふつ、まあ見ておけ。」

数十分後3人はまた先ほどのグラウンドにいた。

「作戦つて何だろな?」

「さあな。」

「アイツの事だ、それなりに良い作戦が思いついたんだろ?」

「待たせたな。」

「やつと来たよ……」

「あわんちゃんは何處にいるのだー?」

「そこは犬のあぐるみの頭から顔を出しためだかがいた。

「何をしている?」

「演劇部から押着してきた。この着ぐるみでのワンちゃんと仲良くなる作戦だ!」

「マイシは本当に頭が良いのか?悪いのか?」

「……ねえ人吉。このお嬢様つてひょっとしてさあ……」

「あ、気づいた？ うん。一週回つて基本バカだよ

「やはりバカか……。」

「貴様らは何故この作戦の素晴らしさが分からん！？ もうよい！ そこで指を咥えて見ておれ！！」

そう言つと意氣揚々と犬へ足を進める。

「ああ～怖くないぞお。私はお前の仲間だぞあ～。」

「キヤインー！ キヤインー！ ー！」

しかし犬はめだかが近づくと情けない鳴き声をあげ、紅葉の足へと隠れてしまった。

「何故だ……。」

「そう落ち込むなめだか。依頼は達成、おお手柄だ。」

「私はただ仲良くしたかつただけなのに……。」

「これはダメだな……。慰めの言葉を入れた方が良いな。

「元気をだせ。ほり、その着ぐるみ姿は中々似合つていろんが?」

「……本当か?」

「あ、ああ……。」

「ウエーン、紅葉お~。」

「だから抱き付くなと……いやもう少諦める。」

とりあえずめだかが泣き止むまで頭を撫でておく事にした。

（翌日）

「何はともあれ依頼達成だ。みんな感謝する。」

「そうだな。しかし、この花は何だ？」

「うむ、これからは依頼が達成する度に花を飾る事にした。花を飾るのは善吉の仕事だ。」

「オッケー。」

「さあ我々に休む暇など無いぞー。もう次の依頼が来ている。」

「内密は？」

「どうやら剣道部の素行が悪いらしい。改善しなければならない。」

「分かった。」

めだかと善吉は剣道部の活動場所へと向かって行った。

「素行が悪い…か、久しぶりに暴れるか。」

紅葉はニヤリとした顔になり後へ付いて行つた。

第七話、初仕事（後書き）

PVが1万日前となり、ユニークも1500以上行きました！

皆さん僕の小説をこんなにも読んでいただきありがとうございます

m () m

これからも宜しくお願いしますーー！

第八話、紅葉の実力（前書き）

紅葉がちょびつとだけ暴れます。

第八話、紅葉の実力

（剣道部員 sides）

ありえねえ……、この大人数で負けるとか……。

「クツソ～、ボロボロだぜ……。」

「何だよアイツ化けモンかよ……。」

「うわっ！ 鼻血止まんねえよ……。」

俺達は腐つても剣道部員のハズだ。なのにあんなど素人に……！

「にしても、アイツ強かったな。」

「ホントだよ。あーあ、何かスゲー悔しいな。」

「俺もだよ。」

「いつ以来だらうか?」こんなに悔しい気持ちが出てきたのは。

「……俺真面目に剣道するよ。」

「俺もするー負けたままなんて嫌だからなーー!」

その後も他の剣道部員がそれに賛同する。

「くつ、俺だつてアイツには勝ち逃げなんかさせねーよ。」

「もつー回みんなで頑張ろ!ばーー!」

「へえ……、先輩達みたいなのが出来るとは思えませんけどね。」

その言葉に剣道部員達が怒りだが、

「んだと…? 誰だテ m……。」

「さつきまで不良気取りの先輩達が出来るわけないじゃないですか。」

「

「イツは剣道部の中でも剣道の腕が五つの指に入る程の……、

「ひ…田向……。」

（剣道部員 side out）

（紅葉 side）

「」の依頼は俺に任せてくれないか?」

「何故だ? 3人行けば良いだろ?」

「まあな…。だが、その間他の依頼でも片付けておけば良いだろ?」

「

「ん~、だがなあ…。」

「良いんじゃねーの? その方が他の依頼片付けるし。」

「むう…、だが紅葉一人で大丈夫なのか?」

「心配には及ばん。」

そつ心配はいらない。というか、負ける要素が見当たらんからな…。

（剣道部活動場）

「失礼する。」

「あん? 誰だよテメー…。」

「生徒会の者だ、剣道部員の素行が悪いと聞いて来た。」

「はい？俺達は眞面目なんですけどねえ。」

しかしその生徒の口にはタバコが咥えられていた。

「そういう事だ。少しお前らを改心させなればならん。」

「……調子に乗つてんじゃねーよー。」

剣道部員が紅葉に右ストレートを放つ。しかし

「ウラアーー！」

紅葉の右ハイキックが部員のこめかみに炸裂する。部員は壁まで吹き飛び呆気なく気絶してしまった。

その光景を見ていた他の部員が、

「うー、この野郎つー！」

「ぶつ瀆しちまえーー！」

部員が紅葉に襲いかかる。

久しぶりの運動だ…。少し遊んでやるか。

そう考えると近くにあつた竹刀を取り、

「ウガッ！」

「グヘアーーー！」

「アベシーーー！」

周りいた部員達を一瞬で一掃する。

「ふん、雑魚すざめる。」

やはりウォーミングアップにもならなかつたか…。

「これ懲りたら大人しくしておけ。」

「ま…、待て…。」

「これで依頼は達成だな。楽過ぎはしないか?」

その数時間後、紅葉はめだか達に会い依頼が達成したのを報告し帰
ろうとした最中、

(尾行されているな…。)

剣道部員の連中か……いや、アイツらは無いな。

「良いだろ？……。」

そう言つと紅葉は校舎裏まで誘導するよつに歩いた。

「紅葉 side out」

「？ side」

「どこに行こうとしてるんだ？」

あの桜島紅葉とか言つ男、本当に一人で剣道部を制圧したのか？

「ん？ また曲がるのか。」

紅葉を尾行している人物が後を追うが、

「なつ、いない！？何処にいる……？」

「……」

「後ろだと……だが、どうせいつて……？」

「簡単な事だ。俺が曲がった時に高くジャンプをして、お前の後ろに着地しただけだ。」

「マジかよ……、本当に人間かよ。」

「そんな事より、誰だお前……。」

「チツ、仕方ねーな……。」

そう言つと紅葉の方へ振り向く。

「俺は日向だ、お前と同じクラスのな。」

「日向 side out」

「紅葉 side」

「日向？」

「ああ、そうだよ。」

「日向……。俺のクラスにそんな名前の奴いたか？」

「俺は日向なぞ知らん。」

「はあ！？ 嘘だろ！？ ！？ ！？」

「本当だ。」

「ぐつ、…まあいい。俺は日向、剣道部に所属している。」

「何？」

さつき叩きのめした剣道部にはこんな奴いなかつたが……、

「さつき先輩達を潰したのお前だろ？」

「……だつたら何だ。」

「別に何もしねーよ。でもな……。」

そう言つと自称同級生が竹刀を取り出す。

「俺と勝負しろよ。」

「良いだろ。」

「あれ？案外物分かりが良いんだな。」

「黙れ、さつきと来い。」

「んじゃ、遠慮なくー。」

日向が紅葉に向かって突きを放つ。

「言っ忘れたけど、この勝負は氣絶した方の負けだぜーー。」

「上等ーー。」

紅葉は軽く突きをかわす。

「まだまだあーー。」

やつ言いと日向が追撃するが、紅葉は涼しい顔をして全て避けてしまった。

「アーラン…、少しハンターをやるわ。」

そして俺は両手を閉じる。それでも全て避ける。

「なつー。」

「これでもダメなのか?とこどん雑魚だな。」

「クソがあーー。」

激怒した日向が竹刀を上から振り下ろすが……、

「もういい。」

そいつ言ひと日向の頭を掴み力任せに地面に叩きつける。

頭が地面にめり込んでシユールな光景であるが、された側はたまつた物ではない。

「死なない程度に加減した、…たぶんな。」

「……。」

数時間後……、

「おーい！誰か抜いてくれーーーー！」

この後、田向が剣道部員に助けてもらったのはまた別の話で…。

第八話、紅葉の実力（後書き）

普通死にますね…。

次回をお楽しみに！

闇話？、普通の高校生になれたの？ part2 (記書き)

フリグなのか？

作者も分からん（笑）

（紅葉 side）

「『マイツもないな...。』

「これだけのグラビア雑誌だ。どれかは当てはまると思ったのだが...。

「あの~、3人を代表して一つ質問良いか?」

「何だ善吉?」

「グラビア雑誌なんか漁つてどうするんだ?」

「そんなもの決まっている、普通になるためだ。」

「いや真顔で言われても.....。」

「もしかして好きなアイドルとかいるの?」

古賀がそう聞くが、

「いるハズがないだろ。」

「ですよね。」

「だったら別に良いじゃねーか、いない今まで。」

「ダメだ。高校生は気になる人が一人いるのが普通らしいからな。」

「へ？」

その言葉に古賀と瀬はキョトンとする。

「いやいや、別にいなくても普通だと思つよ。」

「ああ普通だ。」

「何ー?」

「どうしたんだー? どうしたんだー?」

『普通の高校生は気になる人が一人いてもおかしくねえぞ?』

「書かー、どうしたんだー?」

「いやあー、あれは言葉の綾と書こまですか?」

田が泳ぎあわへつてゐるや書かー。

「もうこー、ならこれ(グラビア雑誌)には用はない。」

「一ヶ月思つたんだけど、お前の好みのタイプってなんだよ?」

「好みのタイプ?」

俺の好みタイプ……、いつも思い浮かばん。

（まあ……仕方ないか。今まで恋愛とは無縁の生活をしていたしな。）

そんな事を思っていた。実際は、紅葉は前の学校ではかなりモテていた。しかし、紅葉はその事に全く気づいていなかったのだ。

俗に言つ『朴念仁』と言つものである。

「その様子だと無いみたいだな。」

「もつたいないねつ、中々のイケメンなのに。」

何故か知らんが褒められた。これは此方も気の効く事を言つた方が良いな。

「アンタは可愛いこと思つべつ、愛嬌がある。」

「ふええ！？／／／」

「いいで口説いた！？」

別に口説いた訳では……。後、何故古賀の顔が真っ赤になつてゐる？

「か、からかわないでよーな、名瀬ちゃん帰ろー。」

「古賀ひやん、顔真っ赤だぜ。」

「真っ赤じゃないよーもひーーー！」

「あつ、待てよ古賀ひやん！悪かつたつてーーー！」

古賀と名瀬が慌ただしく本屋から去つて行つた。

「何だつたんだ…？」

「お前よくあんな恥ずかしいセリフ言えるよな…。」

「…思ひた事を書いたまではだが、

「これもイケメンの特権か…。」

「…まあ次いでこの本を買つか。」

「何だよそれ？」

紅葉が買おうとしていたその本は、

『あのジョンス・リー監修！超簡単なハ・極拳…』

「スグー本だな……。」

「紅葉 side out」

「古賀 side」

恥ずかしいーあんなセリフ真顔で言われるなんてー!?

『アンタは可愛いと思ひ? 愛嬌がある。』

思い出すだけで顔が熱くなる…。こんな顔見せれないよ。

「古賀ちゃん。探したよ……って顔赤つ!？」

早速見られたよ…。

「う、あんま見ないでお…。」

「わ、悪い。でもあんな臭いセリフよく言えたよな。」

「本番だよ…。」

「もしかして古賀ちゃん、やつこの『耐性無』?」

「恥ずかしながら…。」

あんな臭いセリフ初めて言われたよお。

「まあ向いにも本気じやなこと思ひやがへ。」

「へへ…。」

今日の事は早く寝て忘れる事にしてよ。

→古賀 side out

その後、放課後に起きた『古賀ちゃん口説き（？）事件』が何故か
めだかに露呈し、紅葉は小一時間問い合わせられる事となる。

(…おやじへ轟扣の仕業だな。)

紅葉は心の中で呟いた。

ヒロインは誰にするかまだ決めていません。

「この人が良い」って言う人は良ければ意見をください。

短めです。

第九話、天敵

（紅葉 side）

「何処だここは？」

確かにソファーで転寝をしてしまって、気づいたら見知らぬ場所に…。

しかし紅葉には見覚えがあった。今自分がいるこの場所に。

「教室？」

「その通りだよ、ここは教室だ。」

「誰だ！」

「もう殺氣を出さないでくれ、君と争う気はないよ。」

そう言って黒板の前に女性が現れた。

「僕の名前は安心院なじみだ。僕のことは親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「何のつもりだ…。」

「何、君という人物に会つておきたくてな。『アリバイブロック脇罪証明』を使わせてもらつた。」

「どうやら眠つていたせいか、俺の過負荷が上手く作用していなかつたのか…？」

だが今なら作用する、きっと帰るとするか…。

「じゃあな。」

「まあ待ってくれ。」

そして安心院が紅葉に近寄る。

「君の能力に興味がある……。ぜひ欲しいよ。」

「ふん、それが狙いか。」

「安心してくれ、他の能力をあげるから。」

「悪いがこれで間に合っている。」

だが安心院が目の前まで移動していた。そして顔を近付ける。

「じゃあ頂くよ……。」

「断る。」

唇と唇が付きそうになる前に安心院の顔を掴む。

「……ひやふえふえくへえひやひか（やめてくれないか）？」

「何故キスをしようとした？」

「僕の能力『口[ヒ]』（リップサービス）で、スキルの授受をしようととした。」

「やめておけ、ただのキスになるだけだ。」

「本当かい？」

「ああ。」

しかし、この女どうして俺の能力を知っている？

「……最高だ。」

「は？」

「君の能力、ますます欲しくなったよー。」

「……。」

「とはいへ、確かに君の能力を頂くのは至難の業だな。」

「なら諦めひ……。」

「それは無理だ、これ以上天敵を増やしたくないからね。」

「天敵？」

「俺がコイツの天敵？ 別に争う気はないのだが……。」

「何故お前と殺り合わなければならない。」

「ふむ、信じて良いのかい？」

「ああ…。」

二人の間に沈黙が生まれる

「良かつたよ…、君が良い人で。」

「そうか、それじゃあ帰るぞ。」

「ま、待ってくれ。」

まだ何があるのか…、早く帰りたいのだが。

「君とは仲良く出来そうだ、これからも友達でいようじゃないか。」

「悪いがお前の事は信用出来ない。」

「もつ能力を奪おうとはしないよ、安心したまえ。安心院だけに。」

あんしんいん

「……チツ」

「……今舌打ちしたね？」

「じゃあな。」

そうつ言つと紅葉は自らの過負荷を使い、その場からきえる。

（紅葉 side out）

（安心院 side）

「無愛想だが悪い人ではないな……。」

久しぶりに人と話した気がする。少しだけ心が軽くなつたかも知れない……。

「困つた事があれば助けに行くよ、友達だからね……。」

そうだな…、友達は大切にしなくては。

「わたし、今度はちゃんとつかるギャグを考えなくては。」

待つてくれ…、次会った時は抱腹絶倒させてあげよ。」

第九話、天敵（後書き）

意見を下さったアクセルロイさん、ＷＫさん、スノウさんありがとうございます。

これからもよろしくお願いしますm(——)m

第十話、天才 v.s 化物（前書き）

阿久根戦です。

戦闘描写って書くの頭使います……。

第十話、天才 v.s 化物

（紅葉 side）

「今日はどんな依頼が来てんだ？」

「今日は柔道部から来ている、何でも柔道部の今後に関わる事らしい。」

「そりゃ大事じゃねーか。早く行こうぜ。」

柔道部が、一体どんな厄介事を持ち込んだんだ？

（柔道場）

「いらっしゃい！待つてたで生徒会のみなさん……！」

「鍋島三年生、本日はどういった用件で？」

「うふ。実はウチ柔道部の部長なんやけど、もつと遅せなかんねん。」

そして鍋島はめだかの肩を掴みだす。

「セレーネー一部を引き継いでくれる部探しを手伝ってくれへんか？」

「良いだらう鍋島三年生ー！」の黒神めだか、全身全靈をもつて手伝いましょう！「ー。」

「ホンマリー？恩に着るわ。んじゃ、早速部達と戦つてもらひ

わー。」

数分後……、

「さあ来い柔道部諸君！私を倒し見事部長になつてみせよー。」

「ノリノコじやねえか。」

「しかしあれでは意味が無いぞ。……部員達が全く歯が立たないじやないか。」

紅葉の視線の先には、めだかが柔道部員達をいつも簡単に投げ飛ばしている姿だった。

「うへへ……やつぱり黒神ちやんには勝てれへんか。」

「えへへんただ？」のままでは部員の自信が削ぎ落とされただぞ。

「

「じなこじよか？」

「……俺に聞くな。」

「ん？ 君達は……。」

そつまうと金髪の男子生徒が歩いて来る。

「一年生の阿久根高貴君やで。」

「阿久根だ。君は？」

「……桜島紅葉。」

「桜島君か、よろしく。で、横にいる男が。」

「…お久しふりっス。」

「そうだな、久しふりだね。」

何故こんな険悪なムードなんだ?といつか知り合い成る程…、簡単にいふとめだかを奪い合っている仲といふか訳か。

一人盛大に勘違いしている紅葉はそんな光景をボーッと見ていると、

「せやーええ事思いついたでー。」

「どうしたんですか？」

「うん。部長についてやけど、阿久根クンが勝つたら生徒会に入り人吉クンが負けたら柔道部に入つてウチの柔道の部長になる。どない？」

「アンタまさか今までずっと考えてたのか？」

「？。うん、やけけど？」

部員の喧嘩を止めなくて良いのか…。まあそんな事気にする奴には思えんが。

「まさか鍋島先輩それが目的で？」

「あ、バレた？まあええやん。人吉君みたいながんばり屋さんがウチはめっちゃ好きなんよー。」

「これが今世間で噂になつてゐる『リア充』なるものか…。やるな善吉よ。」

「紅葉…お前何か色々と勘違いしてないか?」

「氣にするな。」

「じゃあ早速黒神ちゃんに相談してくるわー。」

そつと鍋島がめだかに向かつて行く。

「良いでしょーーー。誰からの相談でも誰からの挑戦でも受け付ける。どんな内容でや条件でも、如何に困難で理不尽でも享受するーーー。それが箱庭学園生徒会執行部だーーー！人吉善吉、私は貴様に負けるなとは言わん。しかし逃げることは許せんぞーーー。」

まあ面白いのならそれで良いか、善吉には悪いが。

数分後、善吉と阿久根は柔道着に着替え対峙していた。

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式や！無制限十本勝負対無制限一本勝負！阿久根君に十本取られるまでに一本でも取れたらジブンの勝ちや人吉君！」

二人が互いに頷く。

「それでは始め！！」

鍋島がそう言った瞬間、善吉が阿久根の襟を掴むが

『ズドン！』

善吉は綺麗に一本背負いされていた。

（簡単に決められたな、これは勝てるかどうか…。）

その後も阿久根は次々と勝ち数を増やしていく。

「さつすが阿久根君、綺麗な一本やな～。後の先取らせたら右に出るモノはおらんわ。ホンマ天才的で……つまらん柔道や。」

「どうやらずいぶんと天才がお嫌いなようだな鍋島三年生。」

「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんも阿久根君のこともな。才能を努力で踏みにじりたくてウチは柔道をやつとんのよ。」

「ういぶんな物言いだな…。まあ確かに俺もある意味で天才は嫌いだが。」

「安心しろ鍋島三年生、天才などいない。」

「……へ？」

やつぱりとめだかは一步前に出る。

「善吉！ いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるなどは言わん。だから勝つて！ ！」

そしてめだかは少し涙目になりながら、

「貴様がいなくなつたら私はすぐ嫌だぞ！ 困るぞ！ 泣いちゃうぞ！ 」

……善吉も苦労しているな。しかし、いつも人は変わるものなのかな？

そう思つていた矢先、善吉が阿久根の両足を持ち上げて倒した。双手刈りというものだ。

「信じられへん……。阿久根君にホンマに勝つてしまた。いや、それより双手刈りならウチもよつ使つけど人吉君はあんなにも綺麗に……。」

「鍋島三年生、私は天才などではない。善吉と紅葉がいるお陰で生徒会をしていける。私もただの凡人に過ぎない。」

めだかがそんな事を思つていたとはな……。

「むう～、じゃあ桜島君くれへん？」

「何？」

「さつきの阿久根方式で構えへんやうへ。」

「良いにだらつ……。紅葉やつくれるな?」

「勝手にじる……。」

まあ大体予想はしてたがな……。だが、これやるとなると面倒だ。

「じゃあ阿久根君お願ひなあ。」

「…………分かりました。」

さつきの敗戦のショックから立ち直った阿久根も了承する。

「柔道着に着替える、少し待て。」

数分後、紅葉と阿久根が向かい合っていた。

「ルールはさつきと同じやで。それでは……始め……」

「悪いが即刻で終わらせてもうつー。」

阿久根が掴み掛かるが 、

「ふん……。」

次の瞬間、紅葉の姿が消えてしまう。

「なつ、消えた！何処に行つた！？」

「いじつちだ。」

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

その言葉に4人が驚く。それもそのはず、消えた紅葉が阿久根の背後に現れたのだから。

「ぐ、いつの間に……！」

「驚いてこる暇など無いぞ。」

そう言つと紅葉は、ものすごいスピードで阿久根を掴み一本背負いする。周りから見れば、いつの間にか阿久根が投げ飛ばされていたにしか見えなかつた。

投げ飛ばされた阿久根は口を白黒させ、他の3人は啞然としていた。

「終わりだな？帰らせてもらひつぞ。」

紅葉は他のみんなを置いていき柔道場から出でていった。

翌日、紅葉と善吉は生徒会室に向かつていた。

「まさかお前があんなに強いとは思わなかつたよ。」

「ちつともない、ただ喧嘩慣れしているだけだ。」

「いや、アレは喧嘩じやなくて柔道な。」

ドアを開けるとそこには身だしなみをチェックしている阿久根がい

た。

「……何故アンタがいる？」

「ん？ ああ――一人とも来てたのか。 なあに、 答えは単純だ。」

阿久根は善吉を見据える。

「君を追い出すのは諦めたが、 僕はめだかさんを諦めたわけではないでのな。 それに鍋島先輩に退部勧告をされてな。 それに……。」

「「それに？」

「鍋島先輩に言われたんだ、『その努力と根性で惚れた女一人ものにしてみんかい！』ってね。」

「これは応援しているのか？ それともただの厄介払いなのか？ どっちなんだ鍋島……。」

「と、 ついで。 本日付で生徒会執行部『書記』に任命された――

年十一組、阿久根高貴だ。よろしくお願ひします、先輩！」

こうして現在の生徒会は阿久根を新しく入れ、4人（？）となつた。

第十話、天才 v.s 化物（後書き）

ヒロインはもしかしたら古賀になるかも……？

まだ決めてないんですけどね。

第十一話、紅葉恋愛相談所？（前書き）

閑話？に誤字がありました（泣）

「褒められた」を「褒めれた」にしていました、「」を「…」に
（ ） m

第十一話、紅葉恋愛相談所？

「ラブレターとは『存知だらうか？』

それは、気になつてゐる相手に對して自分の気持ちが書いてある恋文の事である。

しかし、そのラブレターを渡せずじまいで恋が終わる者も少なくない。

そんな甘酸っぱい悩みを持つ生徒が生徒会に相談を持ちかける。

八代 side

八代三年生は生徒会室の前にいた。そう、彼女もラブレターについてある悩みを持っていた。

何時でも相談して来いって言つたよな。でも、後輩に恋愛相談とか恥ずかしいな…。

「ええいー・じうじでもなれー」

そつして八代が勢いよく開けると

、

「成る程……」ヒロはそつするのか。

そこには中国武術によくあつそつな動きをしてくる男子生徒がいた。

「……間違えました。」

見なかつた事にじよつ……。やつぱり最初から友達に相談するべきだつたよ。

そつ思い出して行こうとしたが、

「ん？相談者か、ゆつくりしていけ。」

「うえーちよつとー？」

その男子生徒は八代の後ろ襟首を掴むと来客用の椅子まで連れていく。

「生憎、生徒会長は今留守にしてござる。そちらで待つてござる。」

「なんて横暴な……。」

セツヒツと男子生徒は、また中国武術のよつた動きをする。

「最高級に気まずい……。」

八代は生徒会室に来た事を猛烈に後悔した。

八代 side out

紅葉 side

「ふむ、こんなものか。」

やはり、あの時買った本は正解だつたな。これのおかげで大分理解する事が出来た。

『あの本とは閑話?で紅葉が購入したものです。』

「わづかねば……、わづかから何故あの女は『氣ままずひ』を見ていろ?」

「…………。」

（しかしめだか、遅ずれぬれ……。とつあえず内容だけは聞いておくか。）

やれやれと、思いながら女子生徒に聞いていただす。

「で、今日何のよつだ?」

「えつ、でも黒神さんいなこじやん。勝手こなつて跟っこのかよへ。いきなりでびつへつした……」

「構わん、こいつ見えても生徒会の端くれだからな。それで何の用だ？」

「……じゃあ……、聞かせてもらひよ。」

八代が言おうとしたが、不意にドアが開く。

「桜島君、来てたのか。」

「阿久根さんか。」

紅葉は一応年上と話す時は『さん』付けをしてくる。そういうふうに生意気だと言われ、この前に先輩に絡まれたからである（当然返り討ちにした）。

「おや、もう相談者が来ていたのか。」

「ああ、じゃあ…早速内容を教えてくれ。」

「わ、分かった…。」

そう言うと八代は説明し始めた。

「実はラブレターを書きたい」、「書けばいいだろ。」いや最後まで聞いてくんない！？」

八代がプロ顔負けの突っ込みをすると、続きを話す。

「ラブレターを書こうにも字がヘタクソなんだよ。ほら、アタシすばらな性格だし。」

いや知るわけないだろ……。

「だからどうしたら良いか教えてくんない…？」

「「」「このはどうでしょ？」「僕が代わりにラブレターを書きましょう。やうすれば、字が下手なのは隠す事が出来ます。」

『代わりにラブレター書きましょう』だと? 馬鹿げてるな…。そんなもののコイツの為にならんぞ。

「それ良いねえ、じゃあ早速頼むよー。」

そう言うと二人は集中しやすい図書室へ向かつた。数分後、めだかが生徒会室へ入つて來た。

「うん？まだ紅葉しか来ていなかつたのか。」

「やつやがでな。」

「誰かいたのか？」

めだかがそう聞くと、阿久根が生徒会室へ帰つて来た。

「すまない、忘れ物をしてしまった。おや、めだかさん。」

「ちよつちよつい、アイツに聞け。」

「そうだな。阿久根書記よ、私がいない間に何があったのか報告を要求する。」

「分かりました。まず、」

それから阿久根が今までの経緯を話す。

「どうでしょーうー?僕の方法は?」

「…がつかりだ。」

「え?」

「貴様には失望した、もう何もしなくていいぞ。」

そつとめだかは生徒会室から出て行つた。

当然の結果だろつた。まあ……阿久根にしては最悪の結果だがな。

「何故……何故なんだ……？」

（……チツ、仕方ない。）

ここは阿久根の為に一肌脱いでやるとするか……。しかし俺も丸くなつたものだ。人に対して気を遣つなんてな……。

そう思つと紅葉は図書室へと向かつた。

（紅葉 side out）

（八代 side）

「遅い……。」

「どういう事だよ……？女を待たせるなんて仮にもアタシはレディだぞ

！――

「やほりこじか。」

「あつ、わつきの…。」

「アイツは生徒会室にいた中国武術の人だ…。何でこじにっ？」

「先に言つておこう、阿久根は来ないかもしれんぞ。」

「えつ、なつ何でだよ！？」

「生徒会長に戦力外通告を受けたのでな。今はショックで動けん。」

「そつだつたのか…、じゃあ代わりにお前書いてくれよ。」

「この際この人でも良いや、アタシの字の下手さに勝てる人なんていねえし……。」

だがそれを聞いた紅葉はため息を吐いた。

「それでお前は良いのか？」

「どういこいつ意味だよ……？」

「では言この方を変えよう。お前は自分のラブレターを他人に書かれても良いと思つていいのか？」

「それは……。」

確かにあの時は他の人に書こても「いい」と思つてた。でも、冷静に考えてみると……。

「嫌だろ? な、それはやつだ。お前がもし逆の立場ならどう思つ? へへ。」
「そんなの……。そんなの……。」カつぐに決まつていい。

「ムカツクよ…、所詮アタシに対する『仮持物』そんなものかってね。

「

「だいぶな、結局は軽い『気持ち』だったんだと思われるだけだ。……
それで『元気』ある?」

「元気あるかな?…、やる事ないれしかないだろ。

「『手を上げて書かぬよ』って練習するよ。」

「ふつ、まあ…頑張るんだな。」

「素直じやなこねえ、樂こなれば良このし。」

「じゃ黙りせてやるわ。……」つまらねてこた。」

「何?」

「阿久根の事は許してやつてくれ、アイツなりにお前の願いを叶いさせたかつただけだ。」

「そんなの……全然悪く思つてないよ。」

「……そうか。」

やつして紅葉は図書室から退室した。

「不思議な奴……。」

年下なのにどこか説得力があつて貫禄があつた……。でも、アイツのおかげで本当にやるべき事が分かつた！

「よ～しー頑張るぞーーー！」

「図書室では静かにー！」

「……すいません……。」

受付に注意されテンションが下がった八代であった。

「八代 side out」

「紅葉 side」

とりあえずあの女はひとまず大丈夫だろう。だが、字を練習するなら講師がいるな……。

「後は阿久根か…、世話の焼ける先輩方だ。」

紅葉は阿久根がいるであろう生徒会室へ歩く。

第十一話、紅葉恋愛相談所？（後書き）

人の心の描写ってムズいです。

というより小説を書く事自体ムズい……。

第十一話、立て！立つんだ阿久根！！（前書き）

なんか阿久根がヘタレになつた。

阿久根ファンの皆様すいません。

第十一話、立て！立てんだ阿久根！！

「阿久根 sides」

「はあ…………。」

阿久根は椅子にもたれかかるように座り、真っ白になっていた。その姿はまるで、『あしたのジョー』を彷彿とさせていた。

「何がいけなかつたんだ…？」

俺のやり方は間違っていたのか？自分はただ、少しでも告白が成功する確率を上げようとしただけだ……。

「…はあ…………。」

阿久根は本日五十回めのため息をつく。

そしてふと過去の事を思い返す。

「あの時はめだかさんに酷い事をしたな……。」

阿久根は、過去にめだかにした自分の行動を今まで気に病んでいる。

「でも、めだかさんは強かつた。自分より遙かに……。」

そり、そんな気高いめだかを阿久根は尊敬していた。

そんな人物に戦力外通告を受ければ誰だつて落ち込むであろう。

「くじむな……。」

もし、今の自分を見ためだかさんはどう思つのか？また軽蔑するだらうな……。

「ここまで落ち込んでる。」

「うわっ…って、桜島君か…、いつの間に帰つて来たのか？」

「一応ノックしたぞ、気がつかなかつたのか？」

「あー…すまない。気づかなかつた。」

「は…、後輩に恥ずかしい所を見られたな。

「…といひで、どうして戻つてきたんだ？」

「…になつても図書室に来ないのでな、呼びに来ただけだ。」

「図書室？ああ…やつきのラブレターの事か。」

「早く行け、相談者が待つていてる。」

「しかし、俺はもう…。」

『そんな事出来る立場じゃない。』 そつとおひとしたが

、

「いい加減にしろ！ それでも貴様は生徒会の一員かー？」

「阿久根 side out」

（紅葉 side）

「いい加減にしろ！ それでも貴様は生徒会の一員かー？」

全くこじままで弱っているとは、メンタルが弱過ぎる…。

「貴様は生徒会の一員だろ！ 学園で困っている者を助けるのではないのか！ ？ なのに貴様ときたら……！」

「

紅葉は阿久根の胸ぐらを掴む。阿久根は突然の事に口をポカンとしていた。

「一度や二度の失敗ぐらいで弱音を吐くな……」のままめだかに見捨てられたままで良いのか！？」

まあ…めだかがそんな事をすることは思えんがな、念のためにだ。

「それが嫌なら行動で示せ！……独り言だが相談者が字の練習をしている。講師が必要だろうな。」

そつ言い残すと紅葉は生徒会室から出て行った。

中々の演技だつたな…、これで阿久根も動くだろ？。後は、めだかに『阿久根が字の練習に付き合つている』と報告すれば良いか。

「本当に世話の焼ける奴だ……。」

次の日、阿久根が礼を言つてきた。どうやら俺の作戦通りにいったらしい。

相談者は字が上手になり無事ラブレターを書き、めだかにも許してもらひつたようだ。

「君には感謝しきれない。本当にありがとうございます。」

「IJの礼は高くつべ哉？」

「任せてくれ！… そういえばあの相談者、告白は成功したらしく。礼を言つてきたよ、勿論君にもな。」

「やうか…、そいつは良かつた。」

しかし、IJのまま「ハイシリと仲良くなつていけるのか? フラスコ計画が始まれば、俺にもすべき事がある。その時は……。」

「どうしたんだ? 難しそうな顔をして。」

「いや… 何でもない。」

まあ、その時はその時だ。今は『人助け』をしていくか……。

「さて……、次の依頼は何だ？」

第十一話、立て！立つんだ阿久根！（後書き）

難しい文を書こうとしたけど、全然難しくない…。orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1448z/>

普通でありたい過負荷な異常者

2011年12月17日19時49分発行